

東予推進ブロック 研究報告

西条市立丹原小学校、田滝小学校、徳田小学校、田野小学校、丹原東中学校

1 取組の概要

東予推進ブロック（丹原ブロック）は、丹原東中学校と4つの小学校から構成されている。丹原小学校、田滝小学校、徳田小学校、田野小学校の4校は、近隣ながら環境も規模も異なる小学校である。本ブロックがある西条市では、以前より小・中学校の連携に力を入れており、西条市小中学校連携推進事業は、開始して5年目になる。これまで、互いの授業を参観したり、合同研修会を開催したり、行事や授業を合同で実施したりしている。

今年度は、英語コミュニケーション能力育成事業の推進ブロックに指定され、小・中の連携を更に深めながら、各校の授業を中心とした学び合い―授業実践―検証・改善サイクルで研究を進めてきた。ブロック別研究協議会の学び合いで、教員の資質向上、授業のレベルアップを目指し、情報交換やカリキュラム・教材の開発を行った。それらを基にして授業実践、検証・改善を繰り返すことで、学び合いから得た新しいアイディアを次の授業に生かすことができるとともに、互いの学校の児童生徒の実態把握にもつながった。



学び合い

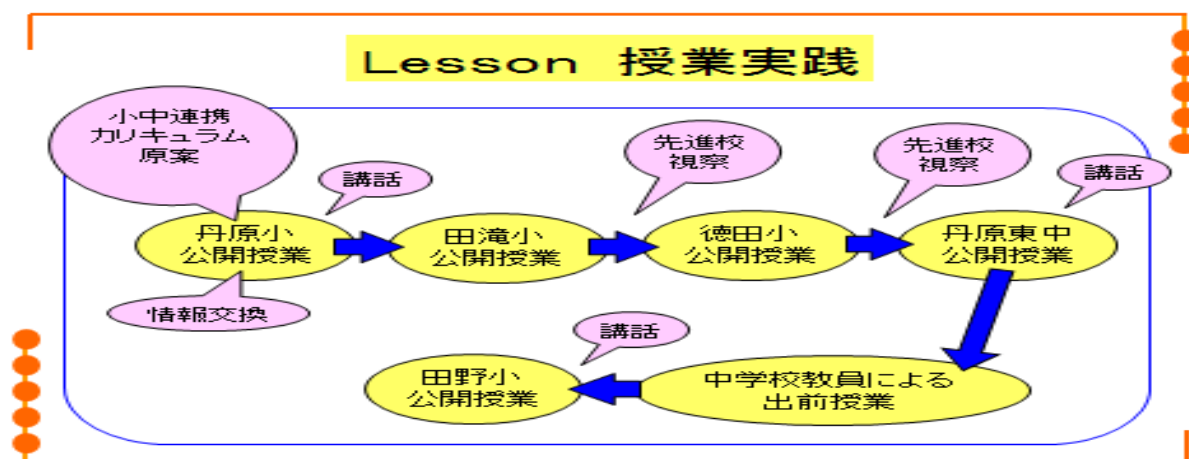
- 実態についての情報交換
- 小・中連携カリキュラム
- 研究会・先進校視察報告
- オリジナル教材開発
- 情報発信

授業実践

- 各校公開授業
- 中学校教員による出前授業

検証・改善

- 公開授業事前事後研究



2 実践内容及び成果等（○成果、●課題）

(1) コミュニケーション能力育成のための指導の在り方

① 教員の意識を変革する

コミュニケーション能力の育成のため、学級経営を大切にすること。また、これまでの外国語活動にありがちだった楽しさのみを追求する“fun”な授業から、知的な面白さのある“interesting”な授業へと改善していくこと、小学校外国語活動を踏まえた中学校の授業を実践することなど、教員の意識を変革し、授業を改善していくことを目指した。

② 児童生徒の意識を開拓する

コミュニケーションをとるときに、「相手を意識する」ということは大変重要であることから、まず相手や状況を見ることから始め、聞いたり相手のことを考えたりすることを意識付ける。そこには、言葉だけでなく、ジェスチャーやアイコンタクトなどの表現も存在する。小学校と中学校が、言語材料やスキルだけでなくコミュニケーションへの積極性においても連携していくことが、コミュニケーション能力の育成につながるものと思われる。

③ 生活とつなげる、小・中をつなげる

授業と生活をつなげ、学習活動に日常性や必然性をもたせた。児童生徒にとって身近な地域教材を使用することも効果的である。また、小・中の連続性の中で児童生徒の成長を考え、各学年で必要なことを、適切な方法で実践していく必要がある。中学校では小学校の既習内容を導入に使ったり、音声による活動で十分復習してから読み書きの活動に進んだりするなどの工夫が必要となる。

○ 外国語活動の授業を、楽しさのみの追求ではなく知的な面白さのある授業へと改善していくこと、小学校の外国語活動を踏まえた中学校の授業を実践することを念頭に置いて研修を深め、啓発することができた。

○ 相手を意識することやジェスチャーやアイコンタクトなど多様な表現方法を、児童生徒の中に意識付ける工夫をしてきた。また、コミュニケーションにおける「聞く」ことに対する意識も高まってきた。

○ 授業と生活をつなげ、日常性や必然性をもたせた学習内容や教材を開発し、学年に即したコミュニケーションの方法も検証してきた。小・中連携した「道案内」の授業は、大変よいモデル授業となった。

● 外国語活動・中学校外国語科の授業改善に対する教員の意識を変えていくことは、今後も各校で啓発していかなければならない。

● 知識や技能だけでなく、コミュニケーションへの積極的な態度も小・中が連携して育成できるようにしていきたい。

(2) 評価の在り方

① 目標・評価の理解

小学校外国語活動と中学校外国語科の目標や評価の観点を明確にして授業を行うとともに、授業のねらいや評価規準を、児童生徒にも理解させる工夫を行った。

② 児童生徒への還元

指導と評価を一体化させ、授業を展開する中で児童生徒への効果的なフィードバ

ックを心掛けた。そのためには、行動観察をしっかり行うことやA L Tとの密接な連携も必要となる。また児童生徒を支援するためのクラスルームイングリッシュの活用や、A L Tによる英語を使った評価も効果を上げた。

③ 児童生徒への意識付け

授業中の指導や支援、振り返りカードなどで、ねらいや評価規準を児童生徒にも意識付けるようにした。また、自己評価、他者評価、相互評価など各校で多様な方法を試みている。一面的な評価だけでなく、多様な評価資料を蓄積していくことや、ねらいに合った記述式の評価を取り入れ、児童生徒への意識付けを図ることなどを検証した。また、小学校の振り返りカードを単元別にポートフォリオとして残していき、中学校につなげていくことも検討している。

- 教員が目標や評価の観点を明確にして、指導と評価を一体化させ、効果的なフィードバックを心掛けてきた。小・中連携させたクラスルームイングリッシュは評価においても、活用することができた。
- 授業の中でのねらいや評価規準を児童、生徒にも意識付ける工夫をし、授業に合った評価方法を公開授業ごとに検証してきた。効果的な評価の在り方の研修が深まった。
- 研究を通してA L Tとの連携が密接になり、評価においてもスムーズに連携が図れるようになった。A L Tの英語での評価も定着し、効果を上げている。
- 児童の振り返りカードをポートフォリオとして累積し、中学校につなげていく際の評価の方法や結果の累積、今後への生かし方は課題のひとつである。

(3) 小・中連携

① カリキュラムの作成と実践

小・中連携カリキュラムでは、まず「英語ノート」と「NEW HORIZON」の題材（内容）のつながりを分析し、ねらいや活動、使用する語彙や表現を明らかにした。そして、小・中連携のポイントを話し合い、活動や学習を充実させ、円滑に接続するための配慮事項を示した。小学校の教員は中学校の学習につなぐという意識をもち、中学校の教員は外国語活動で学んできている内容を把握し系統的に指導を行うようにした。作成したカリキュラムを基にして公開授業や日常の授業を実施し、その都度連携のポイントを修正した。

② 情報・教材の共有

本ブロックは小学校4校の児童が1校の中学校に進学するという地域であり、小・中でうまく連携するためには、小学校同士の小・小連携も欠かせない。互いの学校の児童の実態や外国語活動の状況を把握するとともに、A L Tと相談し、効果的な表現を選んだクラスルームイングリッシュを統一して授業で活用した。さらに、中学校の授業でも生徒一人一人のファイルに貼り活用している。4校の児童が共通のクラスルームイングリッシュに慣れ親しんでいることから、生徒にとっても中学校の学習への移行がスムーズになる。

③ 出前授業などの新しい試み

(3 成果のあった取組事例に掲載)

- 小・中連携カリキュラムを作成し、小学校教員は中学校の学習につなぐという意識をもち、中学校は外国語活動で学んでいる内容を把握し系統的に指導を行うという意識をもつことができた。
- 小学校4校と中学校1校が教材をできるだけ共有し、効果的に活用してきた。クラスルームイングリッシュや電子黒板を利用したゲーム、地域教材などを開発することができた。
- 中学校の英語科教員が各小学校に出向き、6年生の外国語活動の授業を行う「出前授業」を実施した。児童に中学校の学習に興味や意欲をもたせたり、つながりに気付かせたりすることができた。また、児童の実態を把握し、中学校の授業改善に役立てることもつながった。
- 小・中連携カリキュラムは、平成24年度からの外国語活動の新教材や教科書、児童生徒の実態に合わせて修正していかなければならない。
- 「出前授業」は西条市の小中連携事業としても、今後継続していきたい取組である。

3 成果のあった取組事例

(1) 小・中学校が連携した「道案内」の授業

今年度「英語ノート」と「NEW HORIZON」を連携させた、小・中連携カリキュラムを作成した。また、クラスルームイングリッシュや地域教材の開発にも取り組んだ。これらを活用し、田野小学校と丹原東中学校において「道案内」の授業を公開した。

小学校では、日常生活と深く関わっている建物の名称を使い、道案内の内容も児童の実生活に起こりそうなものとして、体験的な活動を中心に展開した。児童の意欲は高まり、コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度が見られた。実生活とつながっていることで、あいさつや手助け、感謝の気持ちを伝えるなどのやりとりに親しむことができた。

中学校では、地域マップを使い、ALTに丹原の観光プランを提案するという内容を展開した。案内の導入を小学校で習った表現を使って行ったため、生徒は知っている表現に安心し、積極的に話そうとする姿が見られた。身近な地域教材を使ったこともコミュニケーションの意欲向上につながっていた。ALTに積極的に質問をしたり、既習の表現を駆使したりする生徒の姿が見られた。

(2) 中学校英語科教員による小学校出前授業

中学校英語科の教員が各小学校に出向き、「出前授業」として、6年生の授業を1時間ずつ行った。児童に中学校の学習への興味や意欲をもたせたり、外国語活動と中学校英語科がつながっているということに気付かせたりすることが、ねらいの一つである。また一方、中学校教員にとっては、実際に小学校の外国語活動の授業を体験したり、児童と触れ合いながら実態を把握したりすることで、中学校での授業改善に役立てることも大きなねらいとなっている。学習内容は「アルファベットで遊ぼう」とし、「話す」「聞く」の音声中心の外国語活動に中学校の「読む」「書く」を少し取り入れた授業とした。十分な打ち合わせを経て、T・Tで授業を実施する中で、小・中の教員の連携を深めることができた。